

探究 II

柄谷行人

講談社

探求 II

一九八九年六月二六日 第一刷発行
一九八九年七月二八日 第二刷発行

著者——柄谷行人
からたにこうじん

© Karatani Kojin 1989, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―三―三 郵便番号二三 電話東京〇三―〇五二―二二(大代表)

印刷所——株式会社精興社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一五〇〇円(本体一四五六円)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部宛に願います。

探究Ⅱ ■ 目次

第一部 固有名をめぐって

第一章 単独性と特殊性 9

第二章 固有名と歴史 21

第三章 名と言語 33

第四章 可能性と現実性 45

第五章 関係の偶然性 58

第二部 超越論的動機をめぐって

第一章 精神の場所 77

第二章 神の証明 96

第三章 観念と表象 118

第四章 スピノザの幾何学 133

第五章 無限と歴史 144

第六章 受動性と意志 153

第七章 自然権 163

第八章 超越論的自己 171

第九章 超越論的動機 186

第三部 世界宗教をめぐる

第一章 内在性と超越性 201

第二章 ユダヤ的なもの 218

第三章	思想の外部性	231
第四章	精神分析の他者	250
第五章	交通空間	271
第六章	無限と無限定	280
第七章	贈与と交換	292

あとがき

308

探
究
Ⅱ

装幀 山岸義明

第一部 固有名をめぐって

第一章 単独性と特殊性

1

私は十代に哲学的な書物を読みはじめたころから、いつもそこに「この私」が抜けていると感じてきた。哲学的言説においては、きまって「私」一般を論じている。それを主観といっても実存といっても人間存在といっても同じことだ。それらは万人にあてはまるものにすぎない。「この私」はそこから抜けおちている。私が哲学になじめなかった、またはいつも異和を感じてきた理由はそこにあった。

といっても、私がこだわってきたのは、「私」のことではない。また、「この私」が特殊であるといいたいのではない。私はすこしも特殊ではない。私は自分がいかにありふれているかを知っている。それにもかかわらず「この私」は他のだれでもないと感じている。肝心なのは、「この私」の「この」の方であって、私という意識のことではない。だから、哲学的な言語のなかに「この私」が抜けているというかわりに、「この物」が抜けているといいかえてもかまわない。たとえば、私が

「この犬」というとき、それは犬という類（一般）のなかの特殊を意味しているのではない。たとえば、太郎とよばれるこの犬の「この」性は、その外見や性質となら関係がない。たんに「この犬」なのだ。

私はここで、「この私」や「この犬」の「この」性 *thisness* を単独性 *singularity* と呼び、それを特殊性 *particularity* から区別することにする。単独性は、あとでいうように、たんに一つしかないということではない。単独性は、特殊性が一般性からみられた個性であるのに対して、もはや一般性に所属しようのない個性性である。たとえば、「私がある」(1)と、「この私がある」(2)とは違う。(1)の「私」は一般的な私のひとつ（特殊）であり、したがって、どの私にも妥当するのに対して、(2)の「私」は単独性であり、他の私と取り替えてできない。むしろ、それは、「この私」が取り替えてできないほど特殊であることをすこしも意味しない。「この私」や「この犬」は、ありふれた何の特性もないものであっても、なお単独的 *singular* なのである。

2

特殊性と単独性はいつも混同されている。それは「個体」というものにとらえ方があいまいだからである。一般に、個体 *individual* とは、それ以上分割できないものことである。ギリシャの自然哲学では、それはアトムと呼ばれている。しかし、それは今日の物理学でいう原子とは別である。原子はいくらでも分割できるし、まだ「それ以上分割できないもの」のレベルに到達していな

い。到達したと思った瞬間に、さらにその下位レベルが目指される。しかし、「個体」の分割不能性は、そういうことは別の事柄である。ひとつの机は個体である。それはさまざまな構造や構成要素に分割できるし、分子や素粒子のレベルにも分割できる。だが、そのときそれは机ではない。

それ以上分割すれば、机ではなくなるようなひとつのまとまりを、われわれは「個体」と呼ぶのだ。日常的にわれわれが individual (個人) と呼ぶものについても、同じことがいえる。われわれは、それを身体的・物理的な合成とみることもできるし、諸行為や諸関係の総体としてみることもできる。が、そのとき個人の個性性は消えてしまう。われわれが漠然と個人と呼んでいるのは、それ以上分割すれば消滅してしまうような一つのまとまりである。それはけっして個人がそれ以上還元できない基本的な単位であるということの意味するのではない。また、それは個人、すなわち人間的個体のみに限定されるのではない。あるものを個体としてみることは、そのものの性質やレベルに依存しないし、それ自体が分割可能であるということとも矛盾しない。たとえば、分子や脳や国家も個体であるし、『第二次世界大戦』も個体である。

個体がそのようなのだとすると、個体の特殊性(個別性)と単独性とはどのように区別されるだろうか。たんに個体が一つしかないということでは、それらは区別されない。この区別は、それらの個体が一般性あるいは集合に属するか否かにある。先にあげた例でいえば、個々の国家は国家という集合のメンバーであり、個々の脳は脳というクラスの一員である。また、たった一つしかないものも、その成員が一つしかないような集合に属するということができるのである。

しかし、『第二次世界大戦』についてはどうだろうか。それが、戦争という集合のメンバーであ

り、その特殊であることは疑いない。だが、そういつてしまうと、『第二次世界大戦』と固有名で呼ばれているものの「単独性」は消えてしまうだろう。何かを個体とみなすことにおいて共通していても、個体を類・クラス・一般に対してみるか、それを単独性においてみるかで違いが生ずる。それは、当の個体自体の性質とは無関係である。

たとえば、東大病院に夏目漱石の脳が保存されている。私はたまたまそれをみたことがあるが、特に変わった脳ではない。また、それは夏目漱石という個体と無縁であり、まして彼のテキストとは何の関係もない。にもかかわらず、この脳は、他の脳とは代替しえないし、脳一般のなかに入らないのだ。それは、この脳が夏目漱石の脳という固有名で呼ばれていることと関係している。それは特殊な脳であるから、固有名で呼ばれているのではなく、固有名で呼ばれているから特異(単独)なのである。もっと厳密に言えば、この脳の単独性は、それを固有名で呼ぶことと切り離しえないのだ。特殊性と単独性の区別は、あとでいうように、固有名の問題に帰着することになるだろう。

3

ある個体の単独性と特殊性の区別は、つぎのようにも考えられる。たとえば、ある男(女)が失恋したときに、ひとは「女(男)は他にいくらでもないじゃないか」と慰める。こういう慰め方は不当である。なぜなら、失恋した者は、この女(男)に失恋したのであって、それは代替不可能だからである。この女(男)は、けっして女(男)という一般概念(集合)には属さない。したがっ

て、こういう慰め方をする者は、「恋愛」を知らないといわれるだろう。しかし、知っていたとしても、なおこのように慰めるほかないかもしれない。失恋の傷から癒えることは、結局この男(女)を、たんに類(一般性)のなかの個としてみなすことであるから。

のみならず、このような忠告は概してあたっている。というのは、「恋愛」においてある個体にこだわることは、その個体を単独性においてではなく、一般的なもの(イデア的なもの)のあらわれにおいてみることであるからだ。たとえばこの女しかいないと思いつめながら、また次に別の女にこの女こそと思いつめていくようなタイプがある。フロイトがいったように、この女への固執は、幼年期における母への固執の再現(想起)である。次々と相手を変えながら、そのつどこの女と思いつめようタイプは、フロイトがいう「反復強迫」である。実は、反復強迫は、キルケゴールのいう反復ではなくて想起であり、同一的なものの再現なのである。ここには、この他者は存在しない。たんに、法則的(構造的)な再現(表象)があるだけだ。

ある個体への過剰な固執は、したがってその単独性とはむしろ無縁であるといわねばならない。プラトンがいったように、エロスとは一般性(イデア)への愛である。一般的に言って、情熱恋愛 passionate love は単独性とは無縁である。たとえば、ヘーゲル・ルネ・ジラルが明らかにしたように、欲望とは他者の欲望つまり、他者に承認されたいという欲望である。ある個体を欲望するのは、それが他者の欲望の対象であるかぎりにおいてである。他者が愛するような者を愛するということは、その者自体を欲するのではなく、それを獲得することが他者の承認を得られるからである。したがって、どんな恋愛も潜在的または顕在的な三角関係にもとづいている。ライヴァルがい

なくなれば情熱恋愛は終る。要するに、情熱恋愛においては、この相手（他者）が問題なのではなく、第三者（他者）、あるいは一般者が問題なのだ。そこでは、この他者というこだわりがあるようにみえて、実はこの他者が徹底的に不在である。

ところで、子供に死なれた親に対して、「また生めばいいじゃないか」と慰めることはできないだろう。死んだのはこの子であって、子供一般ではないからだ。しかし、子供や妻が家畜と同じ財産と思われているような社会では、それが可能であるようにみえる。たとえば、『ヨブ記』では、神の試練に対して信仰をつらぬいたヨブは、最後に妻および同数の子供（男七人と女三人）とより多くの家畜を与えられる。しかし、どうしてそれで償われたといえるだろうか。死んだあの子が取り戻されたわけではないのだ。『ヨブ記』を読んだあとに残る不条理感はそのにある。

ヨブにとっては、妻子は家畜と同じ財産であり、したがって右のような疑念は生じないのである。しかし、家畜にしても、たとえば犬や猫にしても、愛する者はこの犬やこの猫を愛するのであって、それらは代替不可能である。数多くの猫を飼ったことのある者はそのそれぞれを記憶しているものだ。いいかえれば、彼らは猫を特殊性においてではなく、単独性においてみているのである。

キリスト教においてはむしろそのことが強調される。たとえば、イエスがいう「九十九匹の羊より一匹の迷える羊」という寓話は、個人や少数意見を尊重するといった原理とはまったく異質である。それは数量の問題ではない。一匹の羊とは、個物ではなく、この羊のことである。九十九匹のそれぞれがこの羊なのだ。この羊は足し算できない。足し算は羊という集合においてのみ可能である。とすれば、キリスト教は、集合（一般性）に入らないような個性、つまり単独性をはじめて